

「美学」の不在？

—— 18世紀後半から19世紀初頭にかけての美学の実像

桑原 俊介 (東京大学)

18世紀中葉に創始された美学は、その後、レッシング、メンデルスゾーン、ディドロ、カント、シェリングといった錚々たる哲学者たちにより目覚ましい発展を遂げ、カントの『判断力批判』を通じて哲学的学問として基礎づけられたとされる。だが、周知の通りカント自身は『判断力批判』の理論を「美学」と呼ぶことを厳しく禁じたように、あらためて検証し直すなら、上記の哲学者の誰一人として、自身の理論を「美学」と称していないことが明らかとなる。むしろ彼らは時に「美学」を批判し、自身の理論を「美学」との差異化を通じて正当化してすらいる。しかも英・仏語での *aesthetics*, *l'esthétique* の使用は18世紀にはほぼ見られず、その本格的な使用は19世紀を俟たねばならない。「美学」はこうして、18世紀中葉から19世紀初頭にかけての驚くべき「不在」を示すことになる。

だが、むしろ当時「美学」が完全に不在だったわけではない。当時「美学」と呼ばれた学問は、上述の華々しい発展の陰で、大学の講義として細々と継承されていた。そこでの「美学」は、感性や美や芸術に関する高度で自由な哲学的議論ではなく、伝統的な「自由学芸」に相当する大学の基礎的技法論に他ならなかった。19世紀初頭に至るまで人々にとって「美学」とは、大学制度と密接に結びついたパウモルテン流の「規則の美学」以外の何ものでもなかった。しかも「美学」という名称も揺らぎを孕み、弟子のマイヤーですら、「美学」という名称は「必然」ではなく、他の名称でも代替可能とする。本発表ではこうした、先行研究の盲点とも言える、当時「美学」と呼ばれた学問の実像を、(1)統計的書誌データ、(2)当時の大学の講義目録(ハレ大学、ライプツィヒ大学など)、(3)講義で使用された教科書等の調査に基づき、実証的に明らかにすることを試みる。

こうした意味で、上記の哲学者たちが「美学」を批判したのは、旧来の不完全な美学を、あるべき美学に改善するためではない。むしろ彼らは「美学」とは異なる学問を展開していた。こうして敢えて「美学」という名前にこだわることで、当時の「美学」の実像とその隠れた継承線を、史実にそって精確に描き出すことができるようになる。

こうした状況が一変したのは、ヘーゲルが、「芸術哲学」と称されるべき自身の学問を、不承不承ながら、大学の講義名の慣習に従い「美学」と称さざるをえなかったという歴史的偶然による。もしヘーゲルの「芸術哲学」が、大学の講義としてではなく書籍として展開されていたとしたら、「美学」という学問は、19世紀以降に顕著となる詩学や修辞学といった伝統的技法論の衰退とともに衰退し、今日のような高度で豊かな哲学的学問として自立的に展開されることはなかったのかもしれない。